

先の中納言藤原朝臣三守卿は、左京九条に邸宅を持っていて、土地は二町あまり、家は五間である。東隣は施薬慈院であり、西は真言宗の東寺に近い。南は葬斂の地に近く、北には官庫が立っている。泉は南と北にこんこんと湧いており、鏡のように清らかである。小川は東と西をさらさと流れており、溢れんばかりである。風が松や竹をわたれば、あたかも琴箏を奏でるがごとく、紅梅や青柳は雨にあらわれ、まさに錦繡のごとくに美しい。春には鶯が囀り、秋には鴻雁が飛んでゆく。猛暑の候もここは別天地で、清涼さを求めればここで憩む。西方には、四神相応の白虎たる大きな道があり、南方には朱雀にあたる小さな沢がある。僧俗の者が散策するなら、ことさらに遠方の山や林におもむく必要はない。朝夕は絶え間なく車馬が行き交っている。

貧道空海は、かねてより人びとを済めたいとの思いがあり、ひそかに儒・道・仏の三教を学ぶ学校の設立を願っていた。ひとたびこのことを発表すると、二守卿はただちに千金にも値するお屋敷を提供された。売買の契約、金銭などは全く度外視し、ただ自らの未来の菩提成就のためにと寄贈されたのである。昔、給孤独が黄金を敷きならべて買い求めた土地を釈尊に献じたという、仏伝のような労苦をいたすことなく、勝軍王の林泉にも匹敵する吉祥の地を入手することができた。このようにして私の本願はたちまちに遂げることができた。この学校は「綜藝種智院」と名付けることにした。試みに学則（式）をつくり記しておく。

そもそも、古来よりの九流・六芸などの学問は、世間を善くするための舟や橋のよくなものであり、また、十藏・五明といったの仏の教えや学問は、人びとのためのまことと宝である。それゆえに過去・現在・未来におわします如来がたも、いろいろな学問を学んで大いなる覚りを成就され、あらゆる菩薩、賢聖の方がたも、これらの教えをすべて習得して全き智慧を證られるのである。一つの味つけだけで美味しい料理ができたり、ただ一種の音階のみですばらしい音楽を奏でることなど、いまだかつてそのようなことはない。身を立てる要点、国を治める道理はもとより、生死の苦しみをこの世で断じ、涅槃を彼岸で證することも、この仏の教えと世間の種々の学問を修めることを捨てては、誰もなし得ないことである。それゆえに、仏法伝来以来の聖帝・賢臣がたは寺院を建立されて、仏道を讃え仰いで弘められたのである。

しかしながら、寺院の僧侶たちは仏教の經典のみを専らとし、大学の俊才たちは、世間

の学術書だけ読みあさる。そのため儒教・道教・仏教の三教の典籍や、五明の書物のように互いに異なった学問領域の間ではまったく交流がない。だからこそ綜芸種智院を建てて、あらゆる学問全般にわたって多くの学匠を招くのである。このうえは、儒教・道教・仏教真理の明かりによって、闇夜の迷路に惑う人々を導き、五乗ごじょうの教えによって人々を覚りの世界へ急がせようと、切に願う次第である。

ある人が、非難して言うのに、「それは良いことだが、このような事業は先人たちもやり遂げられなかったことで、いまだに有終の美を見ていない。どうしてか」と、吉備きび真備まさきびの儒じゆ仏ぶつ二に教きょう院いんと石いその上かみ宅の嗣やの芸うん亭てい院いんなど、これらの私立学校はいずれも始めは良かったのにいつのまにかなくなってしまう、人影は絶えて、その跡すらわからなくなっているではないか」と。

答えて言う、「物事の興廃は必ず人によるもので、人の昇沈は決まって大勢に支持される真理に則していることによる。大海は多くの河川が集まって深くなり、須弥山しゆみせんはあまたの山と比較できるから高いのである。大きな建物は多くの資材により支えられ、一国の元首は大勢の部下の扶たすけによって安定する。このように多数の同志がいれば尽きることはなく、仲間が少なければ傾きやすいのは自然の理である。今、私の願うところは、天皇陛下にはご許可を下したまい、大臣、太政大臣、左・右大臣がたのご協力をいただき、貴顕名門の方がたや各宗派の高僧方が志を同じくしてご援助くださるならば、この事業は百代の末までも続けられるでしょう」と。

非難した者が言う、「それならば結構でしょう」と。

或いはまた別の人が非難して言うに、「今、国家が大内裏の中に大学寮を開いているいろいろな学芸を勧め奨励している。雷鳴の前に蚊の羽音がかき消されるように、ささやかな一私学などが太刀打ちできようはずもない」と。

答えて言う、「大唐の都城には、坊ごとに学問塾が開かれ、広く子供たちの教育をしており、県ごとに郷学が設けられ、広く学童を指導している。そのため優秀な若者が城内に満ちており、六芸に通じた者が国中にあふれている。ところが今、この平安の京には官立の大学がただ一つあるだけで、学問塾は一つもない。このために、経済的に困難な家の子弟は教育を受ける所もなく、地方に住む者は、学問が好きであっても通学だけで疲れてしまう。今この学校を建て、ひろく教育を施して人びとを救おうと思うのである。また善いことではないか」と。

非難した者が言う、「もしそのとおりになるのであれば、それこそ美をつくし善をつく

して、太陽と月が輝きを争うほどであり、天と地はともに永久を競うであろう。国を益するすぐれた企画であり、人を利するすばらしい智慧である」と。わたくしは優秀ではないが、九仞の功を一簣に欠くという失敗しないために、最後まで努力して、塵ほどの土であつても国土八方の飾りともなる築地に添えて、広大なる四恩の徳に報い、三点の仏果を得る善因にしようと願うところである。

師を招く章

『論語』にいう、「住むのは仁の徳に富んだ人が多くいる場所がよい。住居は仁厚の風俗がある所を選ばなければ、知性ある人物とはいえない」と。また同じ書に、「(礼・楽・射・御・書・数の)六芸に遊ぶ」という主旨の言葉もある。『大日経』いう、「まず阿闍梨は、(中略)衆芸を兼ね学ぶべきである」と。『十地経論』にいう、「菩薩は菩提を成就するために、まず(声・工巧・医・因・内の)五分野の学問を研究して法を求めるときである」と。それゆえにかの善財童子は百十の城を巡って五十三人の師を尋ね求め、常啼菩薩は常に一市に哭して一所懸命に般若の法を求め続けた。したがって、良識を得るためには仁者の処に住むべきであり、覺りを成就するためには五分野の学問の法を学ぶべきである。法を求めるなら必ず大勢の師に習うべきであり、学問を進めてゆくためには衣食の資も必要である。以上の四者が備わり、そして事業は完成する。それゆえ、処・法・師・資の四つの条件を具えて多くの人々を利益し救済しようとするのである。もし処あり、法があつたとしても、師を欠いたならば理解は得られない。ゆえに最初に師を招請するのである。師に二種類あり、一つは仏教、二つは世俗である。前者は仏教經典について伝え教え、後者は仏教以外の典籍を教え弘める。仏法も世間の学問ともに学ぶべきであるとは、私の師の正しいお言葉である。

一つ、仏教者による伝受のこと。

右、顕密二教を学ぶことは僧侶の本分である。仏典以外の書物を理解しようとするならば、一般の教師に任すべきである。仏教の經典・論書の勉学を心に願う者は、仏門の師に習うべきである。教える者は、心は(慈・悲・喜・捨の)四無量心、(布施・愛語・利行・同時の)四摂法に住して、労苦を厭わず、出身で差別することなく、よろしく指導伝授すべきである。

一つ、俗教の博士の教受のこと。

右、九經九流、三玄三史、七略七代や、もしくは詩歌・銘賦等の文学作品の、原文や訳、文法あるいは概説などに精通していたり、また一部の書、一帙の本などで若者に教育できる者は、教師として綜芸種智院に来ていただきたい。もし僧侶の中で一般の典籍の学習を希望する者がいるときは優秀で品行方正な人がそれぞれよろしく伝授していただきたい。もし若い学徒が教養学問を志望するならば、儒教の教師は、慈悲の心もち、忠孝を念頭において、身分や貧富で隔てることなく適宜に指導して、人を教えることを倦むことのないようにされたい。三界のあらゆる人々はみなわが子であるとは大覚世尊のお言葉であり、世界中はみな兄弟であるとは聖人孔子の名言である。これらの言葉をよくよく仰がねばならない。

一つ、師と弟子の糧食のこと。

「そもそも人間はぶら下げられた瓢ひょうではない」とは孔子の道理の言葉であり、「人はみな食によって生きる者である」とは釈尊の話されたところである。したがって、その道を弘めようと思うのであれば、必ずその人々に飲食を与えなければならない。僧侶・一般人、あるいは教師、あるいは学生を区別せず、学問を志す者にはみな等しく給費すべきである。しかし、わたくし空海は、平素より清貧を旨としているので、まだ充分に必要な経費を支弁できない。とりあえず若干の物資を入れて費用に充てたのである。もし、国を益し、人を利せんとする意志があり、迷いから抜け出て覚さとりを證しょうそうと志し求める人がいるならば、私と同様に、たとえ僅かであっても寄付して、わが願いに協賛せられよ。世々に生まれ生まれて、一緒に仏の教えによって多くの人々の利益になるようにしたいのである。

天長五年（八二八）十二月十五日

大僧都空海記す